

生徒指導・教育相談における児童生徒を支援する力を高める研究（第一年次）

－児童生徒理解に焦点を当てて－

教育相談チーム

〈研究の要旨〉

いじめ・不登校などの解決は、本県においても喫緊の課題となっている。それらの課題解決のために教員としてできることの一つは、授業づくりや学級づくりなどを通して、児童生徒に学校が安心できる居場所であると感じさせることであり、そのためには、教員の児童生徒を支援する力を高めることが不可欠である。本研究では、児童生徒理解に焦点を当てた校内研修と日常指導の充実により、教員の児童生徒を支援する力の向上をめざした。

I 研究の趣旨

文部科学省の平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、全国の小・中・高等学校の半数以上でいじめが認知されている。また、校種によって多少の差異はあるものの、不登校児童生徒数も依然として減少していない。本県においても、平成27年度の小・中・高等学校のいじめの認知件数は前年度の約1.4倍、小・中学校の不登校児童生徒数は1,000人当たり12.3人（前年度11.6人）となっていることから、いじめ・不登校など生徒指導上の諸問題への対応は、喫緊の課題となっている。

これらは、学校生活や家庭生活等における不安や悩み、不満など、欲求がかなえられない現状に対する児童生徒の葛藤の表現であるとも考えられるため、教員には、授業づくりや学級づくりなどを通して、児童生徒を適切に支援することで、心理的な不安等を軽減し、児童生徒に学校が安心できる居場所であると感じさせることが求められる。「生徒指導提要」でも、問題行動の予防の観点から「それぞれの教員が児童生徒の人間性を信じ、児童生徒が本来持つ将来の可能性、潜在能力を正しく生かすことができるよう心がけ、自己指導能力の育成を図っていかねばなりません」（文部科学省、2010）と述べられていることから、学級を中心とした学校生活全体で児童生徒が「自己存在感」を感じたり、望ましい人間関係をつくったりする取組を行うことが強く期待されている。

教員が、児童生徒のニーズに合わせた適切な支援を行うためには、児童生徒の特徴や傾向を理解することが不可欠である。「生徒指導提要」においても、「教員は、すべての児童生徒には問題行動の要因が潜在している可能性があるということを常に念頭に置き、児童生徒の発するサインを見逃さないよう、〔中略〕児童生徒理解を着実に進め、問題行動の早期発見に努める」ことが求められており、確かな児童生徒理解に裏付けられた生徒指

導を行うことは教員の責務ともなっている。

そこで、本研究では、児童生徒理解の在り方や児童生徒理解の深化、理解したことを生かした指導・支援の在り方に焦点を当てた校内研修と日常指導^{※1}の充実を図ることを通して、生徒指導・教育相談における教員の児童生徒を支援する力を高めることをめざした。

※1 児童生徒の学校生活を充実したものとするために行う、学校生活全般における日常的な指導。

II 研究の概要

1 研究仮説

各学校において、児童生徒理解の在り方や深化に焦点を当てた校内研修と、児童生徒理解を生かした日常指導の充実を図れば、教員及び教員組織の「児童生徒を支援する力」を向上させることができるであろう。

2 児童生徒を支援する力について

本研究における「児童生徒を支援する力」は、平成24年度に本教育センター（以下、教育センター）教育相談チーム（以下、当チーム）が規定した以下の六つの力とした（「福島県教育センター研究紀要第41集」参照）。

〈教員が個人として身に付けたい力〉

- A 1 児童生徒を個人・集団として理解する力
- A 2 コミュニケーション力
- A 3 児童生徒間に人間関係づくりを促進する力
- A 4 指導困難事例への対応力

〈組織として高めたい力〉

- B 1 同僚と助け合い協力して活動する力（職場）
- B 2 同僚間で承認感を高め合う力（職場）

教員が個人として身に付けたい力（A 1～A 4）は、日々の児童生徒との関わりの中で身に付けるものであり、確かな児童生徒理解とその積み重ねによって高められるものである。また、組織として高めたい力（B 1・B 2）は、それぞれの教員の個人として身に付けたい力

(A1～A4)の高まりと、教員同士のつながりによって高められるものである(「福島県教育センター研究紀要第43集」参照)。そのため、本研究における校内研修では、特に個人として身に付けたい力(A1～A4)の向上をめざす内容を取り上げることとした。

3 児童生徒理解について

前述のように、教員の児童生徒を支援する力の向上は、確かな児童生徒理解を生かして児童生徒を指導・支援していくことと密接に関わっている。また、「生徒指導提要」では、児童生徒理解について、「生徒指導の基盤」であり、「一人一人の児童生徒の『生きる力』を伸ばすためには、教員は児童生徒を十分に理解することが何よりも大切」であるとも述べられている。

そこで当チームでは、児童生徒理解を「見る(知る)」「読み解く(深める)」「生かす(支援する)」の三段階からなる一連の流れととらえ、各段階を次のように位置付けた。

- 「見る(知る)」段階；学習場面や生活場面、遊びの場面など学校生活における様々な機会を通して児童生徒に向き合う際に、児童生徒の姿や行動をありのままに見取る段階。
- 「読み解く(深める)」段階；児童生徒の姿や行動の背景を様々な視点から探り、理解を深めていく段階。
- 「生かす(支援する)」段階；深めた理解を基に、児童生徒が生きる力を伸ばしたり、自立したりできるようにするための支援や指導を行う段階。

加えて、児童生徒理解をより確かなものとするために、「主観」「客観」「共感」の各視点から児童生徒を理解することを重視した(図1)。

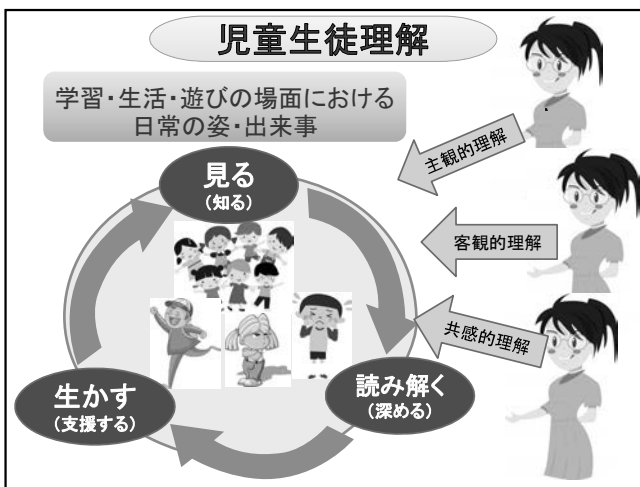


図1 児童生徒理解について

4 研究の構想

本研究は2年間で行うものとし、一年次は、児童生徒理解の促進をめざした校内研修と日常指導を通して、二

年次は、一年次の研究実践から見えた成果と課題に基づいた校内研修と日常指導を通して、教員の児童生徒を支援する力を高めることをめざす。その際、Q-U^{※2}のデータが満足型の学級(以下、満足型学級^{※3})である教員に対して、日常指導や学級経営のこつ、工夫などについて聞き取りを行い、その結果を基に日常指導の充実に資する資料の整備を図る(図2)。

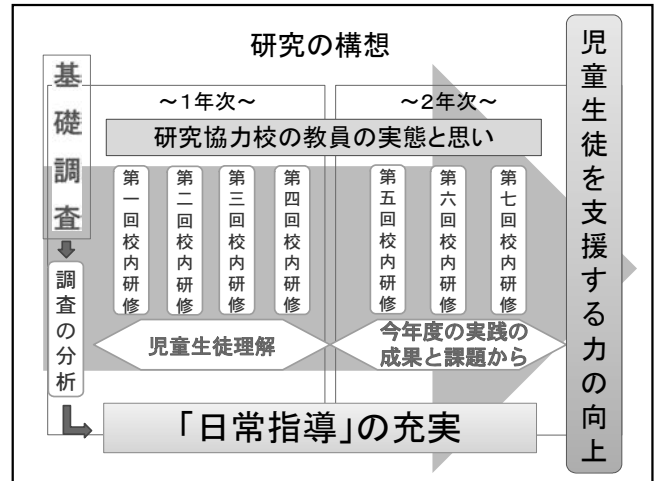


図2 研究の構想

※2 学級集団の状態や児童生徒個人の満足感と意欲を把握するアンケート。

※3 Q-Uの学級満足度尺度において、学級生活満足群に70%以上の児童生徒が位置している学級。

III 研究の実際

1 日常指導の充実に期す視点を探るための基礎調査

(1) 基礎調査の意図

日常指導をより充実させるためには、教員自身が自分の日常指導の傾向や現状を把握することが重要である。そして、把握したことを基に課題や視点を明確にし、その上で、具体的な指導の姿を自分なりに思い描いて実践につなげていくこと、他の教員の取組など、様々な情報を参考に児童生徒の実態に応じた具体的な手だてを模索・構築することが大切になってくる。そこで、当チームでは、教員が自身の日常指導について振り返ったり、今後の日常指導の参考にしたりする上で有益な情報を提供したいと考え、基礎調査を実施した。

(2) 基礎調査の対象、内容、方法

① 基礎調査の対象

基礎調査は、平成27年度のQ-Uの結果が「満足型学級」であった担任を対象に実施した。「満足型学級」では、児童生徒が友達に認められていると感じている「承認感」が高く、友達に嫌なことをされていると感じている「被侵害感」が低いため、このような学級をつくっている担任には、学級経営や日常指導に工夫やこつがある

と考え、それらの担任を調査の対象とすることにした。

② 基礎調査の内容と方法

ア 「学級づくり」についてのアンケート①

Q-Uの質問項目をもとに、「承認感」を高める取組、「被侵害感」を低める取組について自由回答法で尋ねた。

イ 「学級づくり」についてのアンケート②

児童生徒への声かけや座席の配置など、日常的な指導の意図や工夫について4件法と自由回答法で尋ねた。

(3) 基礎調査結果の活用

回収したアンケートの中から有益な指導内容や工夫を集約して「日常指導ふりかえりシート」を作成した(図3)。このシートは、「経営姿勢」「教師と子ども」「学級の雰囲気づくり」の3領域21の質問項目から構成されており、4件法で答えるチェックシートとなっている。本研究では、このシートを教員自身が日常指導の傾向や現状を把握する際に活用した。

年 月 日		日常指導ふりかえりシート			
		学校 名前【 】			
		<small>あてはまらない</small> <small>あてはまる</small> <small>あてはまらない</small> <small>あてはまる</small>			
No	質問項目	4	3	2	1
1	教師や友達の話を良く聞くことができるように、話を聞く姿勢や目線、心構えなどを指導している。				
2	児童生徒の集中力や意欲を高めるために、話を聞きたくするような工夫(教師の演技やジェスチャー、児童生徒とのやりとりなど)をしている。				
3	いじめられたり、排除されたりする児童生徒が出ないように、いじめを許さないことを児童生徒に明確に話している。				
4	暴力や悪口、からかいなどを見聞きした時には、それを見逃さず、迅速に毅然とした対応をしている。				
5	暴力や悪口、からかいをしてしまった児童生徒に対して、その理由を聞き心構えを理解した上で、自分の行為や相手の気持ちを振り返らせている。				
6	児童生徒が持ち帰る学校生活を送ることができるよう、学級掲示や棚、教師用机などを整理とすることを心がけている。				
7	集会や学校行事などに対しては、その意義や参加態度などについて事前に指導し、目的意識をもって参加できるようにしている。				
8	給食や清掃の時間は、ルールやマナー、役割を明確にし、児童生徒が公平性を感じながら過ごせるように努めている。				
9	保護者との信頼関係を深めるために、保護者からの連絡には、誠実かつ迅速に対応するようにしている。				
10	児童生徒が授業で自信が持てるように、机指すの際に考えの良さを認め、励ましてから発表させるようにしている。				
11	児童生徒が授業で活躍できるように、学習へ取り組む際のポイントを示したり、勉強の仕方を教えたりしている。				
12	児童生徒を深く理解するために、なるべくたくさん声をかけ、ささいな会話からも児童生徒の気持ちに寄り添えるようにしている。				
13	児童生徒を深く理解するために、作文や日記、生活ノートなどを活用し共通の話題を見つけ、コミュニケーションに生かしている。				
14	いじめや孤立を防ぐために、そのような心配がある児童生徒に対して、個別に声をかけたり話を聞いたりするようにしている。				
15	友達同士のよさを認め合うことができるように、帰りの会・短学活で友達の良いところを認め合う時間を設けている。				
16	児童生徒が友達のよさを認め合えるようにするために、児童生徒の得意ない得意な行動などを例にあげ賞賛したり感謝したりしている。				
17	学級のまとまりをもたせるために、ペアやグループでの活動を多くし、協力しなればできない課題を設定している。				
18	「学校は間違える所だ」ということを児童生徒に示し、互いに意見を自由に言い合える雰囲気づくりをしている。				
19	授業の中で、児童生徒同士が「予想・再生・換言」などの言語活動を行うことで、意欲的に話を聞ける雰囲気づくりをしている。				
20	学級がまとまって諸行事に取り組めるように、目に見える形でスローガンや目標を掲げ、児童生徒の意欲付けや意識付けを図っている。				
21	学級がまとまって活動していることを児童生徒自身が自覚できるように、他の学級・学年の先生と連携を取り、ほめてもらうようにしている。				

図3 日常指導ふりかえりシート

また、基礎調査協力者の回答は、「基礎調査結果」として冊子にまとめ、学級を「満足型」にしている教員の実践が他の教員の参考となるようにした(図4)。

「学級づくり」についてのアンケート①から【小学校版】

1 授業の中で児童生徒が活躍できるようにするための支援・学級集団づくり

児童が仲間から認められることで、自信をもって活躍できるようにするために

- ・よいところを具体的に伝え、全体で認め合えるようにしてきた(道徳・学活等)。
- ・毎授業の中で全員1回は音読をしたり、質問に答えたりする。
- ・なかなか自分から挙手をしない児童に対して、「この考えとってもいいから、発表して」と励ましてから発表させる。
- ・よい考えをノートに書いている児童を意図的に指名して、授業の主役に仕立てる。

授業の楽しさや、考えの広がり意識できるように

- ・できるだけ子どもたちにとって魅力ある課題を設定するように心掛けている。
- ・適宜、ペアやグループ活動を取り入れ、一人ひとりの考えや意見を発表する場を保障している。その際、自分の考えを持つ時間を設けている。
- ・全体発表では、友達の発表に対し、意図的に繰り返させたり、質問させたり、続きを発表させたりするなど児童の意見を「つなぐ」ようにする。

図4 基礎調査結果の掲載内容(抜粋)

2 研究協力校における実践

(1) 研究協力校

- ・A市立B小学校(教職員数14名,児童数57名)
- ・A市立C中学校(教職員数12名,生徒数46名)

両校は、校庭や体育館を共用しながら、同じ校舎で小・中学生が共に生活をしている学校である。そのため、教員同士の連携も図られやすく、より深い児童生徒理解をベースに、小・中学校9年間を見通した児童生徒支援をすることが可能となっている。両校の教員が同じ場で同じ内容の研修を受けることにより、互いに理解を深めながらより連携を図ることができるとともに、児童生徒を支援する力を高めることができるであろうと考え、両校を研究協力校(以下、協力校)に選定した。

(2) 校内研修の内容を検討するための事前調査

校内研修の内容を検討するために、教員に対しては「児童生徒を支援する力」に関するアンケート(図5)を、児童生徒に対してはQ-Uを実施し、協力校の教員や児童生徒の実態を把握した。

① 教員の実態把握

「児童生徒を支援する力(A1~B2)」に関するアンケートは、評定尺度法による選択式(4件法)で実施した。その際、自由記述欄を設け、生徒指導・教育相談における教員の思いや願い、校内研修に対するニーズ等を把握した。

② 児童生徒の実態把握

- Q-Uの結果から、以下の内容について把握した。
- 「学校生活意欲」;「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」(中学生用は、「教師との関係」「進路意識」を加える。)
 - 「学級満足度」;「承認感」「被侵害感」
 - 「ソーシャルスキル」;「配慮のスキル(対人関係の基本的なマナーやルールが守られているか)」「かか

わりのスキル（人とかかわるきっかけや関係の維持ができていますか）

○内面と行動の両面から児童生徒を理解する力の向上を図りたい。

○発達の特徴や発達の課題を踏まえた児童生徒との関わり方について学びたい。

「児童生徒を支援する力」に関するアンケート【小学校版】

先生が普段行っていることについて、 4 3 2 1
4 3 2 1
 近いと思う数字に○をつけて下さい。

【A1：児童生徒を個人・集団として理解する力】
 1 私は、小学校段階の発達の特徴や発達課題をふまえて児童とかかわっている。
 2 私は、LDやADHD等の発達障がいの特徴について理解している。
 3 私は、児童を自分の見方のみで理解するのではなく、アンケート調査や検査なども活用して客観的に理解するようにしている。
 4 私は、能力面・心理面・環境面・生育歴など、幅広い面から児童の理解を行っている。
 5 私は、児童の学級生活への満足感など、集団の状況を客観的に把握して学級への指導を行っている。

【A2：コミュニケーション力】
 6 私は、児童の話や話を聞く際に、うなずきを入れたり相手の話を繰り返したりして気持ちを受け止めながら話を聴いている。
 7 私は、児童をほめる際に、結果を称賛するだけでなく、途中の努力や取り組みを認めそれを伝えている。
 8 私は、相談で来校した保護者に対して、労いの言葉をかけたり努力していることを支持したりしながら接している。
 9 私は、自分の児童の見方やとらえ方の傾向を理解し、それをふまえて児童とコミュニケーションをとっている。
 10 私は、相手の気持ちや立場を大切にしながら話をしている。また、必要なときは、自分の考えや意見・気持ちを率直に話している。

【A3：児童生徒間の人間関係づくりを促進する力】
 11 私は、学級の集団づくりや人間関係づくりを意識した学習指導や生活指導を行っている。
 12 私は、構成的グループエンカウンター・ソーシャルスキルトレーニング・アサーショントレーニングなどの手法を個や集団の指導・援助に活用している。
 13 私は、集団づくりや対人関係の学習の際は、活動の中にリハーサル（練習）やロールプレイ（役割演技）を取り入れるとともに、児童と活動の振り返りを行っている。

【A4：指導困難事例への対応力】
 14 私は、問題を抱えた児童への支援を考えると、問題解決に向けて、能力面・心理面・環境面・生育歴などの情報を幅広く集めている。
 15 私は、問題を抱えた児童への支援を考えると、原因の追求に留まらず、児童のよさやできていることにも注目し具体的な支援策を立てている。
 16 私は、問題を抱えた児童を支援するとき、一人で対応が困難な場合は、同僚や学年などに協力を依頼したり、共に対応してもらったりしている。

【B1：同僚と助け合い協力して活動する力】
 17 私は、同僚と元気にあいさつをしている。また、あいさつをされたときは、相手を見てあいさつを返している。
 18 私は、同僚の仕事への頑張りを成果を認めて声をかけている。
 19 私は、児童のことや学級の様子について同僚とよく話している。
 20 私は、同僚から仕事の助けを求められたときは、進んで援助・協力している。

【B2：同僚間で承認感を高め合う力】
 21 私は、集団づくりや人間関係づくりの学習など、よりよい学級経営について同僚と話している。（情報を交換している。）
 22 私は、児童の気になる情報を、関係する同僚にしっかりと伝えている。また、問題を抱えた児童などへの支援について話している。
 23 集団づくりや人間関係づくりの学習など、積極的な児童指導について学年会などで話題にしている。また、学年全体で具体的に取り組みを進めている。
 24 問題を抱えた児童などに対して、学年などで支援策について話し合っている。また、役割を分担するなどして組織的に対応している。
 25 私は、困った時には同僚に援助を求めている。

【○：平均が高かった項目 ●：平均が低かった項目】

〈教員が個人として身に付けた力〉

A1 児童生徒を個人・集団として理解する力
 ● 1 私は、小学校（中学校）段階の発達の特徴や発達段階をふまえて児童生徒とかかわっている。

A2 コミュニケーション力
 ○ 6 私は、児童生徒の話や話を聞く際に、うなずきを入れたり相手の話を繰り返したりして気持ちを受け止めながら話を聴いている。
 ○ 7 私は、児童生徒をほめる際に、結果を称賛するだけでなく、途中の努力や取り組みを認めそれを伝えている。

A3 児童生徒間の人間関係づくりを促進する力
 ○ 11 私は、学級の集団づくりや人間関係づくりを意識した学習指導や生活指導を行っている。
 ● 12 私は、構成的グループエンカウンター・ソーシャルスキルトレーニング・アサーショントレーニングなどの手法を個や集団の指導・援助に活用している。
 ● 13 私は、集団づくりや対人関係の学習の際は、活動の中にリハーサル（練習）やロールプレイ（役割演技）を取り入れるとともに、児童生徒と活動の振り返りを行っている。

A4 指導困難事例への対応力
 ○ 16 私は、問題を抱えた児童生徒を支援するとき、一人で対応が困難な場合は、同僚や学年などに協力を依頼したり、共に対応してもらったりしている。

図5 アンケート（小学校版）

図6 アンケートの結果（抜粋）

③ アンケートから把握された教員の実態としたい

アンケートの結果（図6）から、協力校の教員の児童生徒を支援する力には、以下の課題があることがうかがえた。

- 児童生徒の発達の特徴や発達段階の理解
- 構成的グループエンカウンター^{※4}、ソーシャルスキルトレーニング^{※5}、アサーショントレーニング^{※6}などの手法の理解と活用のしかた

○多面的な児童生徒理解の在り方

※4 ゲームの要素をもった課題と取組の振り返りを含んだグループ体験活動。取組の中で仲間との心のふれあいを体験し、自他理解を深めたり承認感を高めたりすることができる手法。

※5 よりよい人間関係を築き、維持していく社会的技能を向上させるトレーニング。

※6 自分も相手も大切にしながら、自分の意見や気持ちを表現できるようにするトレーニング。

また、教員の思いとして、以下のことが挙げられた。

○教育相談的な手法の活用の仕方を知りたい。

④ Q-Uの結果から把握された児童生徒の実態

Q-Uの結果からは、以下の実態が把握された。

- 友達から悪ふざけをうけている児童生徒が少ない。
- 学級の雰囲気が良いと感じている児童生徒が多い。
- 「配慮のスキル」が高い児童生徒が多い。
- 「承認感」が高くない児童生徒が複数見られる。
- 自分が中心になったり積極的に話したりすることが苦手な児童生徒が多い。
- 「かかわりのスキル」が低い児童生徒が多い。

(3) 児童生徒理解の重要性を再確認する校内研修の実態と考察

事前アンケートからとらえられた協力校の教員の実態としたいや願いに加え、Q-Uの結果から把握した協力校の児童生徒の実態に基づき、校内研修のテーマを以下のように設定した。

- 第1回「自身の日常指導をふりかえる」
- 第2回「Q-U学習」
- 第3回「Q-Uの結果を生かした具体的な対応」
- 第4回「ストレスマネジメント」

なお、本紀要には、第1回から第3回までの校内研修

の実際と考察について記述する。

① 第1回校内研修

ア テーマ設定の意図と研修の概要

教員がこれまで身に付けた児童生徒理解に関する知識やスキル等を日常指導の中で生かし、児童生徒を支援する力の向上を図ることができるよう、「日常指導ふりかえりシート」を活用して自身の日常指導の傾向や現状を把握したり、具体的な日常指導のねらいや方針を明確にしたりする活動を行った。

イ 主な内容

(ア) ウォーミングアップ

今回が初めての小・中学校合同研修だったため、参加者の気持ちをリラックスさせ、自己開示や自他理解が促進されることをねらい、構成的グループエンカウンターエクササイズ「質問ジャンケン」「他己紹介」を行った。小・中学校の教員、教育センター所員と一緒に活動することで、心のふれあいが促進され、互いに話しやすい雰囲気をつくることができた。

(イ) 自身の日常指導に関する意見交換

小・中学校の教員が、「日常指導ふりかえりシート」を使い、自分自身の日常指導について振り返った。その後、両校の教員が混在する4人組となり、自分の取組について話したり、他の教員の話の聞いたりしながら、日常指導の具体的な取組について意見を交換した(図7)。その中では、「小学校と中学校では、児童生徒への関わり方や学校生活、授業の進め方も違うため、意見交換ができたことはとても有意義だった」と、改めて小・中学校における指導のポイントの違いを認識する声が開かれた。また、『「日常指導ふりかえりシート」で自分の指導ができていないところのアドバイスや、他の先生がどう指導しているのかについて具体的な話を聞くことができたことは、今後児童生徒を指導していく上で、大変参考になった」と指導上の悩みや困難に感じている部分について解決の方向性を見いだす教員の姿も見られた。



図7 意見交換の様子

(ウ) 今後の方針を確認する活動

「日常指導ふりかえりシート」の結果や意見交換を基に、今後、特に力を入れて取り組んでいきたい日常指導の内容を明確にするとともに、具体的な対応策を考えた。その際、より実践可能な具体策となるように、先の4人組でアドバイスや意見を自由に提示し合った。研修の最

後には、今後、自分に合った指導法や支援の仕方を検討・構築していく際、前述の「基礎調査結果」を参考にしてもらえるよう助言した。

ウ 参加者の様子

初めは緊張感もあったが、自分に関することを紹介したり、意見を述べたりする活動を多く取り入れたことにより、研修後半には教員同士の活発な意見交流が見られるようになった。4人組で今後の日常指導について話し合う場面では、「自分に足りない日常指導の内容も分かり、今後どう指導していくべきかが分かった」と語る姿や、「自分の信じてやっていることが『日常指導ふりかえりシート』に載っていたので自信をもって続けようと思った」とこれまでの取組に自信を深める姿も見られた。また、「自分の指導を見つめるよい機会になった」「他の教員が、具体的にどのような方法で(工夫をして)児童生徒と関わっているのかを知ることができた。自分にできそうなことを考えて実践していきたい」という感想からは、それぞれの教員が、他の教員の様々な取組を知るところをきっかけに、自分の日常指導について見つめ直している様子がうかがえた。

小・中学校合同による研修の意義については、『中1ギャップ』に代表されるように、小・中学校では環境が大きく異なる。そのギャップをなくすことはできなくても、9か年の中でそのギャップに耐え得る子どもを育成するために、このような研修は欠かせないと感じた」という感想が寄せられた。この感想からも、小・中学校合同の研修を通して、両校が同じ校舎で生活しているメリットを意識的に活用していこうとする意欲の高まりが感じられた。

エ 考察

今回の研修を通して、それぞれの教員が自分自身の日常指導の傾向をとらえたり、ねらいや方針を明確にもって日常指導に取り組もうとする意欲を高めたりすることができた。また、協力校2校間の教員の同僚性や協働性の高まりを感じることもできた。

② 第2回校内研修

ア テーマ設定の意図と研修の概要

協力校では、以前からQ-Uを実施しているものの、その結果を十分に活用することができていない、という課題があったため、Q-Uのデータを児童生徒理解の深化に生かすことを目的に、その読み取り方や活用の仕方について研修を行った。

イ 主な内容

(ア) データの読み取り

教育センターの指導主事から、Q-Uの読み取り方に

関する説明を受けた後、自分のクラスや関わりの深いクラスの状態について、個人と集団の二つの観点からデータを読み取った。その際、個人の状態を、回答の各一覧表から、また、学級集団の状態を、座標上のプロットからとらえた。このことにより、被侵害得点の高い児童生徒が、いじめや不登校などの問題行動に関係する危険性が高いことや、様々なデータから総合的に児童生徒を理解することが大切であることなどについて共有された。

(イ) 他の教員との意見交流

組織として児童生徒理解を深め、深めた理解を今後の児童生徒の支援に生かすことを目的に、各学級担任と養護教諭等担任以外の教員が各クラスの状態について意見交流を行ったり、共通理解を図ったりした(図8)。



図8 共通理解の様子

ウ 参加者の様子

異学年の教員間での意見交流や、管理職と担任との話し合いが活発になされた。特に、養護教諭からは、『要支援群』だった児童生徒に対して、もっと積極的に話を聞くようにしたい」といった思いが語られ、今回の研修が組織的な取組を促進する一助となったことがうかがえた。

意見交流は研修時間内にとどまらず、研修後には、昨年度の小学校6年生の担任と今年度の中学校1年生の担任との間で次のようなやりとりがなされた。

現担任：去年の子どもたちの結果、気になるでしょう？
 前担任：あれ？D子が「不満足群」に入っているんだ。意外だな。
 現担任：生活ノートに「友人関係で困ってる」って書いてきたのよ。小学校の時もそんなことあった？
 前担任：D子は、「クラスをよくしたい、みんなと仲よくしたい」という気持ちが強くて、空回りすることもあったので、気を付けて声をかけるようにしていたよ。
 現担任：なるほど。周りの子に求め過ぎるところがあるのね。上手に自分の気持ちが伝わるようにアドバイスしてみるわ。

このことから、小・中学校合同の研修には、児童生徒の成長を9年間のスパンで見守ろうとする意欲や、小・中学校の教員が組織的・意図的に児童生徒を支援してい

こうとする意欲を高める効果があることがうかがえた。

エ 考察

今回の研修を通じ、参加者の多くから客観的な資料の有効性を実感する声が聞かれた。また、それを児童生徒の支援に生かしていこうとする意欲の高まりも確認することができた。客観的データに基づいて学級担任と担任以外の教員と一緒に学級集団の状態を分析し、児童生徒理解に努めたことは、児童生徒を学校全体で理解し、支援していこうとする意識を高める上で効果的であった。

③ 第3回校内研修

ア テーマ設定の意図と研修の概要

協力校の児童生徒に行ったQ-Uの結果からとらえられた「自分が中心になったり積極的に話したりすることが苦手」「『かかわりのスキル』が低い」といった課題の改善に向けて、教育相談的な手法^{※6}を取り入れた自己開示、自己主張に関する校内研修を行った。

※6 予防・開発的な教育相談の視点から、好ましい人間関係を養ったり、自己理解を深めたりするなど、人格の成長への援助を図ることが期待される手法。

イ 主な内容

(7) 教育相談的な手法の必要性と有効性に関する説明

少子化、核家族化、一人親世帯の増加など様々な理由により家庭や地域の人間関係が希薄になっていること、人間関係づくりに向けては教育相談的な手法を活用することが有効とされていること等について説明した。

(イ) 構成的グループエンカウンター・アサーショントレーニングを取り入れた演習

構成的グループエンカウンターのエクササイズ「コロコロトーク」は、すぐろくの要領で、止まったマスに書いてある題について話したり行動したりするエクササイズである(図9)。ゲーム的な要素が強いため、楽しみ

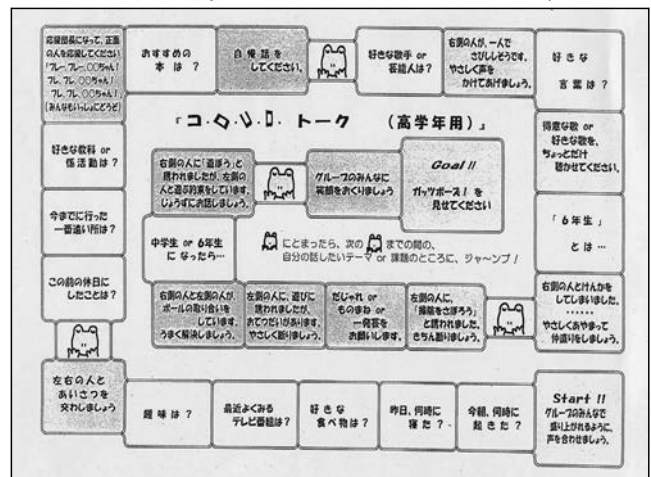


図9 「コロコロトーク (高学年用)」シート

ながら行うことができること、話す順番や内容といった

枠が決まっているために心の準備ができ、自己開示しやすいことなどが特徴であり、自己表現が苦手な児童生徒にとっても取り組みやすいエクササイズとなっている。この活動では、エクササイズへの取り組みやすさや、自己開示を通じた自我理解の深まりについて体験的に理解してもらうことをめざした。

また、三つのタイプの自己表現（「攻撃的な自己表現」「非主張的な自己表現」「アサーティブな自己表現」）について体験的に学ぶアサーショントレーニングの演習では、「ラーメン屋でみそラーメンを注文したら、しょうゆラーメンを出された」という場面において、自分ならどのように対応するかを考えた。加えて、以下の場面を設定することで、アサーティブな自己表現についてより理解が深まるようにした。

「今日の算数（数学）の学習がよく分からなかった人は、昼休みの時間に先生と一緒に勉強しましょう」と先生がおっしゃいました。わたしは、授業の内容がよく分からないので昼休みに勉強したいと思っていましたが、友だちのEさんに「昼休みに一緒に遊ぼう」と誘われてしまいました。

また、この活動では、自分たちで考えた表現でロールプレイを行い、その表現の妥当性を検討したり、修正したりすることを通して、相手を大切に自分の気持ちの伝え方について考えることができるようにした（図10）。



図10 ロールプレイをする教員

ウ 参加者の様子

今回の校内研修では、家族の構成人数の変化の話を導入に教育相談的な手法の必要性と有効性について説明したため、「子どもをとりまく家族の状況などについて改めて知ることができた。『分かっているだろう』と思わず、一つ一つ教えたり、児童生徒同士の関係性づくりを意図的に行っていかなければならないと思った」といった感想が寄せられた。また、コロコロトークの演習では、参加者が和やかな雰囲気の中で、にこやかに自己開示をしながら、相互理解を深める姿が見られた。参加者からは、「小・中学校の教員が互いのよさを感じながら、インフォーマルな部分で互いを更に知る機会になった」と相互理解の深まりを実感する感想が聞かれた。加えて、「本校は、小規模で人間関係が狭いので、いろいろなトレーニングを意識して行うことで、相手を傷付けずに自己主

張する表現を身に付けさせることが大切だと思った」といった感想が語られたことから、児童生徒の自己主張スキルを高める必要性に気付く姿や、今後それらについて意図的に指導していこうとする意欲の高まりを見取ることができた。

エ 考察

今回の研修を通して、多くの教員に教育相談的な手法の有効性や必要性について実感してもらうことができた。また、「自分の学級でもやってみたい」といった意見が多く出されたことから、教育相談的な手法を生かした児童生徒支援の広まりが期待された。

(4) 校内研修等の成果を確認する事後調査

① 事後調査の対象、内容、方法

実践の効果を確認するため、教員には「児童生徒を支援する力」に関するアンケートを実施し、4件法の平均値でその変容をとらえた。児童生徒の変容は、Q-Uにより把握した。

② 事後調査から見えたこと

ア 「児童生徒を支援する力」について

〈教員が個人として身に付けたい力（A1～A4）〉については、小・中学校ともに、設問1「発達の特徴や課題を踏まえた児童生徒とのかかわり」が、小学校で2.6から3.2へ、中学校で2.9から3.4へ、設問12「教育相談的な手法の活用」が、小学校で2.5から2.9へ、中学校で2.4から3.0へと変化した。これらは、本研究を通して、協力校の教員の児童生徒理解に対する意識が高まったり、校内研修を通して、教育相談的な手法の有効性や必要性への理解が高まったりしたためと考えられる。

〈組織として高めたい力（B1・B2）〉については、小・中学校ともにほとんどの設問において数値が上昇した。特に、設問24「問題を抱えた児童生徒への組織的な対応」が、小学校で3.0から3.3へ、中学校で2.6から3.4へ、設問25「困った時の同僚への援助要請」が、小学校で3.2から3.6へ、中学校で3.3から3.6へと変化した。これは、校内研修の中に、自分の考えを話す、相手の考えを聴くなどの活動を多く設定したことにより、話しやすい雰囲気が醸成され、親交も深まり、同僚性が上昇したことと、意見の交流を通して、小・中学校両校の指導の方針や方向性が確認され、組織として取り組むことの大切さが共有されたことに起因していると考えられる。

さらに、小学校において、設問10「教員自身の望ましい自己表現」が、2.8から3.3へ変化したことから、アサーショントレーニングに関する校内研修を経て、教員自身の自己主張に対する意識が高まったことが推察される。また、中学校において、設問4「多面的な生徒理解」

が、2.9から3.3へ、設問14「問題解決のための多面的な情報収集」が、3.1から3.8へ変化している点からは、多面的な児童生徒理解を重視した校内研修を繰り返し実施した結果、教員の児童生徒理解に対する見方や考え方が広がったことが推察される

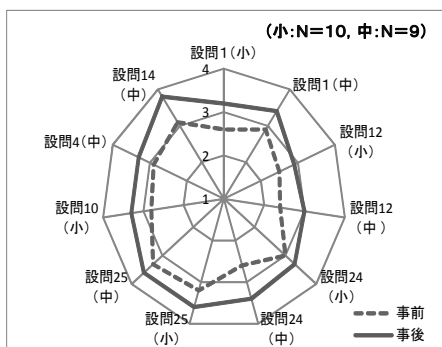


図11 事前・事後調査の結果（抜粋）

イ Q-Uについて

小学校では、「学校生活意欲」の高まりが見られた。特に、「学級の雰囲気」に関する平均値が上昇しており、中でも「クラスのみならずいろいろなことをするのはたのしいですか（下学年）」「あなたのクラスは、勉強やいろいろな活動に、まとまって取り組んでいると思いますか（上学年）」の質問については、四つの学年で平均値が上昇した。これは、校内研修による児童生徒理解の深まりや、教育相談的な手法等を活用した研修内容を学級づくりに生かすことができているためではないかと考えられる。また、「被侵害得点（不適応感、いじめ・冷やかかしなどを受けているか）」の平均値が低下した学級が多く見られたことから、各担任が日常指導の見直しを行い、具体的な取組の目標を明確にしたことにより、日常指導の充実が図られたことが推察される。

中学校では、「学校生活意欲」の中の「教師との関係」について平均値の上昇が見られた。特に、「担任の先生とはうまくいっていると思う」だけでなく、「学校内に自分の悩みを相談できる先生がいる」「学校内には気軽に話ができる先生がいる」の平均値が上昇していることから、客観的資料を基に、他の教員との意見交流を通して児童生徒理解を深める研修を体験したことにより、多くの教員が校内の児童生徒の現状を理解し、積極的に関わったり、支援したりしようとしていることがうかがえる。また、「承認得点（友だちや教員から認められているか）」の平均値が上昇した学級が多く見られたことから、教員が児童生徒を多面的・多角的に理解し、その理解に基づき、きめ細かい指導や支援を行ったり、児童生徒の人間関係づくりに関する研修で学んだ内容を学級づくりに生かしたりしていることが推察される。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 「基礎調査」を実施するとともに、その結果から、「日常指導ふりかえりシート」と「基礎調査結果」を作成し、研究に活用することができた。
- (2) 協力校の教員に「日常指導ふりかえりシート」を実施することで、自身の日常指導の充実に向けて意識の高揚を図ることができた。
- (3) 同一の校舎で生活しながらも、これまで教員同士が教育相談・生徒指導について互いに学び合う機会が少なかった協力校において、小・中学校合同の校内研修を複数回実施したことにより、課題意識とともに小・中学校9年間を見通した支援を行う意義が共有された。
- (4) Q-Uが客観的な児童生徒理解を深める上で有用であることを両校の教員で確認したことにより、教員の児童生徒理解に関する意欲や、深めた理解を今後の指導に活用しようとする思いを高めることができた。
- (5) 事前・事後のアンケートの比較から、多角的・多面的な理解を基に児童生徒を支援していこうとする意識の高まりや、組織としての同僚性・協働性の高まりを確認することができた。

2 研究の課題

- (1) 協力校における「日常指導ふりかえりシート」や「基礎調査結果」の活用状況について確認し、それらが児童生徒を支援する上でどのように有効であったか、具体的にどのような支援に結び付いたかについて把握する必要がある。
- (2) 児童生徒が学級担任の日常指導をどのようにとらえているかについて、可能な限り把握する。
- (3) 年間数回の教育センター主体による校内研修だけでは、教員の「児童生徒を支援する力」の向上を図ることは難しい。そのため、当チームが昨年度までに作成した「児童生徒を支援する力が高まる校内研修実践資料」の活用を提案するなど、協力校の教員が主体的に校内研修を進めることができるよう支援していきたい。

<参考・引用文献>

- 1) 生徒指導提要 (文部科学省 2010年)
- 2) 小学校学習指導要領解説【特別活動編】 (文部科学省 2008年)
- 3) 提言 我が国の子どもの成長環境の改善にむけて (日本学術会議 2016年)
- 4) 入門学校教育相談 嶋崎政男著 (学事出版 2014年)
- 5) THE 子ども理解 「THE教員力」編集委員会著 (明治図書 2015年)